

確率

$$\text{確率} = \frac{\text{それが起こる場合の数}}{\text{全体的場合の数}}$$

$$(\text{確率}) = \frac{(\text{その場合})}{(\text{全体})}$$

試行 …… さいころを1回投げる

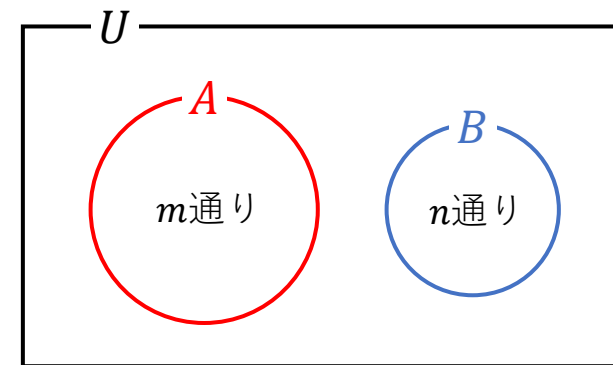
事象 …… 4の目が出る

事象は試行の結果として起こることがらのこと

場合の数の数え方

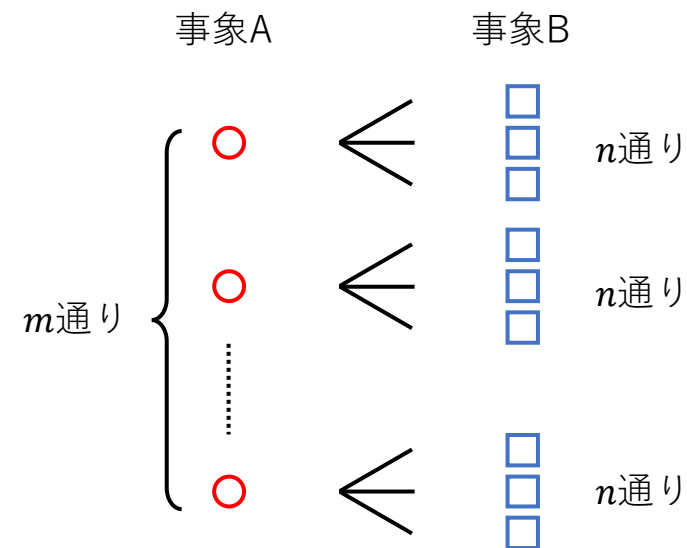
【和の法則】 = 「または」 のとき …… +  
 事柄A、Bが同時には起こらないとき、Aの起こり方がm通り、Bの起こり方がn通りとすると、AまたはBのどちらかが起こる場合の数は、m+n通りである。

【積の法則】 = 「かつ」 のとき …… ×  
 事柄Aの起こり方がm通りあり、そのおののに対して事柄Bの起こり方がn通りあるとき、AとBがともに起こる場合の数はm×n通りである。



事象Aまたは事象Bが起こる場合の数

m + n 通り



事象Aかつ事象Bが起こる場合の数

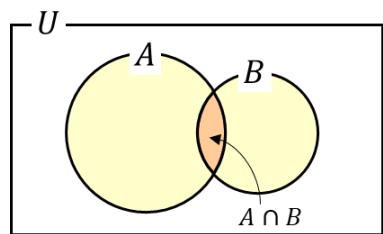
m × n 通り

事象が

排反

排反事象とは「同時に起こらない」事象のこと。  
 「互いに排反である」とは「同時に起こることがない」こと。

- さいころ 1個を投げて、偶数の目が出る (事象)
- さいころ 1個を投げて、奇数の目が出る (事象) } 排反
- 1個のさいころを投げて 1の目が出る (事象)
- 1個のさいころを投げて奇数の目が出る (事象) } 排反ではない
- トランプを 1枚だけひくとき、ハートが出る (事象)
- トランプを 1枚だけひくとき、クローバーが出る (事象) } 排反
- トランプを 1回だけひくとき、スペードが出る (事象)
- トランプを 1回だけひくとき、8が出る (事象) } 排反ではない



「または」

$$P(A \cup B) = P(A) + P(B) - P(A \cap B)$$

A 「または」 Bが起こる確率

A 「かつ」 Bが起こる確率

AとBが排反のとき、  
 $A \cap B = \emptyset$   
 なので、  
 $P(A \cap B) = 0$

試行が

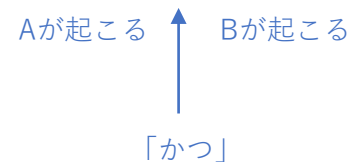
独立

独立とは、前に行った試行の結果が次の試行に全く影響を与えないこと。

独立試行の確率

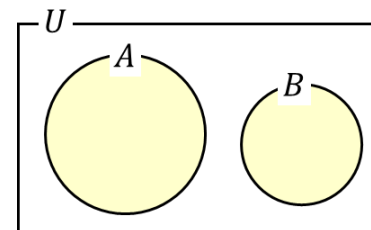
2つの試行  $T_1, T_2$  が独立であるとき、 $T_1$  で事象 A が起こり、試行  $T_2$  で事象 B が起こる確率は

$$P(A) \times P(B)$$



AとBが排反のとき、

$$P(A \cup B) = P(A) + P(B)$$



## 反復試行の確率

ある試行において、事象Aが起こる確率を  $p$ 、その余事象の確率を  $q = 1 - p$  とする。この試行を  $n$  回くり返す反復試行において、事象Aがちょうど  $r$  回起こる確率は、

$${}_n C_r p^r q^{n-r} \quad (r = 0, 1, 2, \dots, n)$$

である。ただし  $p^0 = 1, q^0 = 1$  とする。

(例) 1個のさいころを3回投げるとき、3の目がちょうど2回出る確率を求めよ。

3の目が出る確率 .....  $\frac{1}{6}$

3の目以外が出る確率 .....  $\frac{5}{6}$

さいころを3回投げて3の目がちょうど2回出るといのは次のような場合考えらる。

	1回目	2回目	3回目		
${}_3 C_1 = 3$ 通り	○	○	×	$\frac{1}{6} \times \frac{1}{6} \times \frac{5}{6} = \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \left(\frac{5}{6}\right)^1$	←
	○	×	○	$\frac{1}{6} \times \frac{5}{6} \times \frac{1}{6} = \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \left(\frac{5}{6}\right)^1$	←
	×	○	○	$\frac{5}{6} \times \frac{1}{6} \times \frac{1}{6} = \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \left(\frac{5}{6}\right)^1$	←

それぞれの場合の確率は同じ

${}_n C_r$  通りの場合があって、それぞれの場合の確率がどれも同じ  $p^r q^{n-r}$  なので、

$${}_n C_r p^r q^{n-r}$$

↑  
いつも同じ確率なので  
 ${}_n C_r$  を「かける」

確率が「または」で連結されている形なので、「たし算」すればよい

同じものが  ${}_3 C_1 = 3$  通りあるので、「かけ算」する